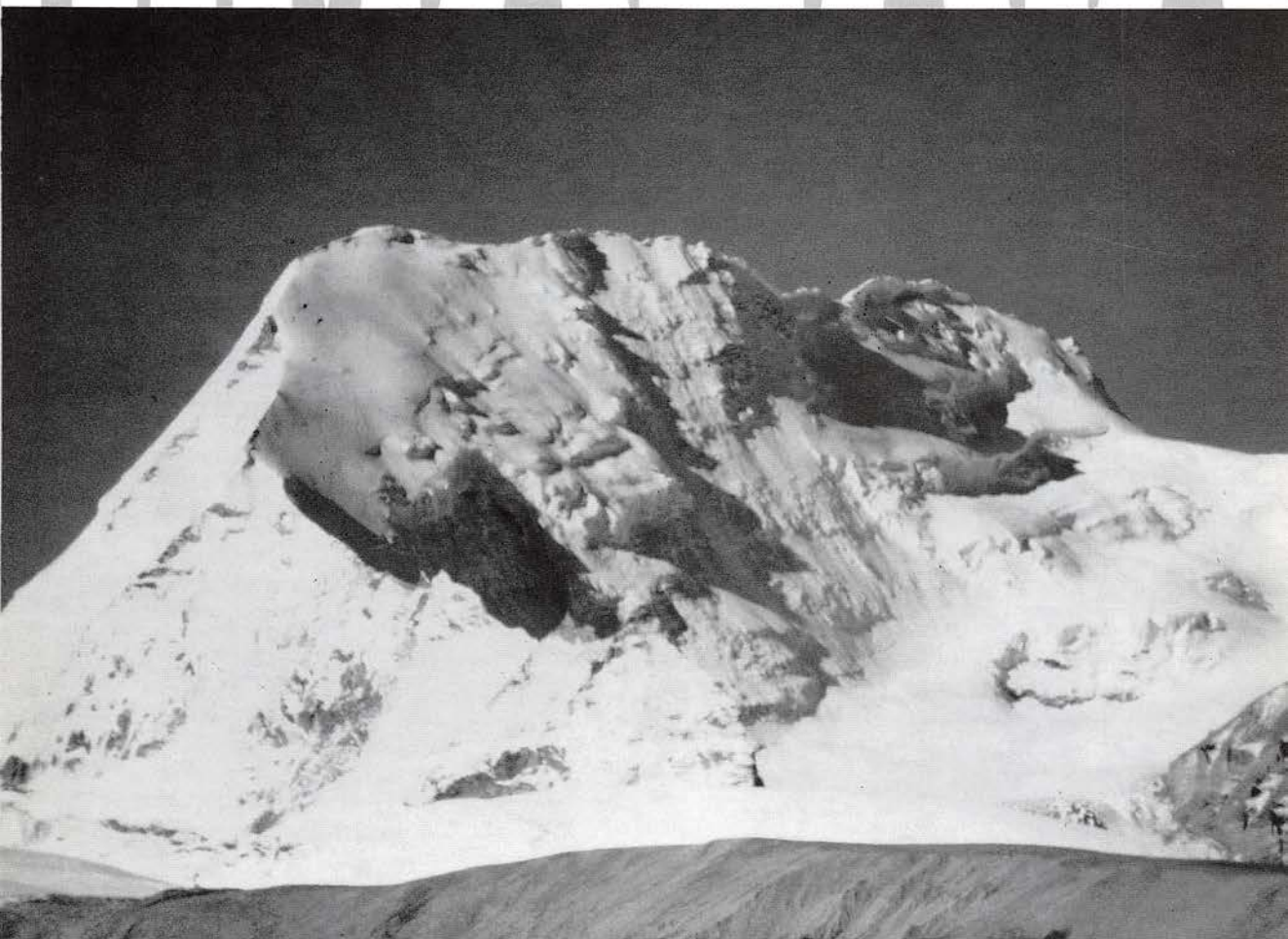


# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No.351



**2001 FEBRUARY**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 2001年H A J 登山隊隊員募集

## 中、ネ国境 ヤンラ・カンリ(7,429m)

ガネッシュ・ヒマールと言う名で日本人には馴染み深い山群の主峰がヤンラ・カンリである。

1955年10月24日、スイスの著名な登山家のレイモン・ランベール(41)と、フランスの女流登山家のクロード・コーガン(29)ら3人によって、ネパール側のサンジュン氷河から初登頂された。

60年5月31日、イギリスのP.J.ワレイスとギャルツェン、ノルブ2人のシェルパが主峰の東にあるドームに登頂したが、主峰は断念している。

いまだに第2登を許していないが、今回の計画は、中国領の北面から登頂を目指すもの。北面は1998年のH A J隊がカバン峰の帰途偵察隊として初めて入山し、登路を探った。手つかずの新鮮な山であり、静かな山行が楽しめる。

意欲ある岳人の応募を期待します。

記

1.期間 2001年9月10日～11月8日(60日間)

2.募集人員 4名程度(現在8名決定)

3.負担金 100万円

4.資格 冬山の稜線を20kg程度の荷物を持って行動できる登山経験のあること。協調性があること。未知の山に挑むリスクを認識できること。

5.申し込み〆切 2001年1月30日(最終案内)



▲ヤンラ・カンリ北面。中央左上から右下の稜を予定

### 表紙写真

「ヒマラヤ349号」表紙写真の左の山である。標高7,202m。未踏峰。東側には鋭峰があり更に東は広大な大陸氷床の様相をしている。

(記:山森欣一)

## ヒマラヤ No.351

1. チベット旅事情	沖 允人
4. 現代の“シャングリラ”をめぐる本家争い	中村 保
9. ネパールを騒がすマオイストの事件簿	
13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉	
15. 2001年インドの主な祝祭日	
16. ヒマラヤ登山者アンケート調査結果	
18. トータル獲得標高の変遷	
24. 寸感・事務局日誌	

# チベット旅行事情

2000年夏の旅から

沖 允人

## ■はじめに

2000年7月22日から9月19日の約2ヵ月間のうち、前半の約1ヵ月は、上海からラサまで日本から持ち込んだ小型電気自動車の展示・試走しながらの陸路の旅であった。約9000kmを走破したがこの距離は、稚内から鹿児島までの約3倍になる。後半の約1ヵ月は、ラサからカイラスを一周し、そして、ラサから成都・上海経由の空路で帰国した。

当初はラサからカイラスを経由して北上し、和田（ホータン）に出て、そこから空路でウルムチ・上海経由で帰国する計画であった。この旅行許可は取得することはできたが、今年は例年になく雨期が長引き、道路状況が悪く、走行はかなり困難であること、そのための予備日を多くとらなければならず、旅行費用が高くなるので断念した。これと併せて、カイラスの北の日土からパンゴン湖に沿って西へ移動し、インド・ラダックのレーに出るという計画も立てたが旅行許可取得に至らなかった。しかし、この計画実現の夢は捨てないで、現在も許可をインドと中国両政府に継続申請中である。

以上の旅行を実施するために、約2年掛けて、中国各地の旅行事情を調査した。ここではそれらのうち、チベットを中心に参考になると思われることと、今回の旅の経験をまとめた。

なお、帰国報告書『上海・チベット 一万キロ』（約140頁、領価2500円）を11月15日の帰国報告会の時に発行したので、必要な方は送料・梱包費等を含め80円切手20枚（割引値段）を同封して、下記の住所へ申し込みいただければ残部がある限り、お送りします。

〒326-0808 足利市本城3-3905-7-703 沖允人

## ■隊の構成と行動概要

私たちの隊は、「国際クリーンエネルギー学術調査隊」という名称で、足利工業大学総合研究センターが、栃木県、足利市、下野新聞社などの後援を得て主催したものである。隊は、本隊、学術隊、カイラス隊、韓国隊等からなり、日本人15名に韓国、中国、インド、ネパールの5ヶ国からの隊員で構成され、総隊長は総合研究センター長の牛山泉教授、本隊隊長は筆者、韓国隊はソウルのチベット研究所理事長の朴鉄岩教授ら5名であった。女性2名を含む学術隊（隊長・日本大学・山家哲雄）は、クリーンエネルギーに関するカトマンズでの国際会議に出席した後、ヒマラヤを陸路で越えてラサで本隊に合流した。

旅のコースは、困難ではあったが、目新しいものではなく、すでに多くの隊が走破したり、探査したりしていて、文献も多く発行されているのでここでは省略する。例えば、カイラスへの旅は、「チベット連続登頂登山隊報告（下）」（『ヒマラヤ』No.341、2000 Apr.、pp.1～7）に最近の記録があり、チベット辺地旅行については阿部淳さんの記事「崑崙北蔵縦断探査踏査メモ」（『ヒマラヤ』No. 348、2000 Nov.、pp.12～15）がある。

私たちのカイラス一周の旅は、雨期が長引いたこともあって、カイラスの麓のタルチェンまでの標高4000-5000mのチベット高地では、道路の決壊や橋の流出が続出し、大変な旅であった。途中で断念して引き帰そうと思ったことが何度あった。

旅を終えての印象は、チベットは興味のある困難な旅はできるが、秘境の旅としての楽しみは多くを期待できないという感想である。

## ■車の持ち込み

日本から中国へ自動車を持ち込むのは大変困難である。中国が国際的な自動車組織に加入していないため、いわゆる「カルネ」が取得できない。

査 証  
VISAS



ラサで延長したビザ  
◀(二〇〇〇年HAJ登山隊)

軽自動車なら許可取得や通関が容易であるという情報から、中国への電気自動車は小型のものにした。ところが、横浜から海路で上海に輸送したが、上海の税関を通過するまでに1ヵ月弱掛かってしまった。これは、軽自動車でも四輪車は車の大小にかかわらず、すべて同じ輸入手続が必要であり、しかも車検を受け、中国のナンバーを取得しなければならないことが分かり、これらが可成り煩雑であったことによる。もちろん、この輸送や手続きは素人でできるものではなく、東京と上海の専門業者に依頼した。足利から上海で受け取るまでの費用は約50万円であった。

この車はラサで廃車にした。まだ十分使用できるものであったが、ラサから日本までの輸送費が高く、日数も掛かり、この間にバッテリーが放電してしまうということなどからである。私たちの電気自動車は現在もラサのどこかにはあるはずである。

中国では、国際運転免許証は使用できない。したがって、中国の免許証を取得しなければならない。これには、日本の運転免許証と顔写真2枚を持って日本の陸運局事務所に相当する役所で申請し、3ヵ月間有効の運転免許証を取得する。手続きから運転免許証取得までに、ほぼ、2日掛かる。

## ■ビザ

外国人が観光で訪れる中国のほとんどの都市は外国人開放都市になっているが、都市と都市を結ぶルートについては未開放地区域になっているところが多い。したがって、陸路で移動する場合は、ビザの他に、車と人間の通行許可書が必要になる。

辺境地帯を旅行するためのビザは登山隊などと同じ、カテゴリー「F」の業務渡航ビザである。もちろん、通行許可書は訪れる先々の公安局でチェックされ、場合によってはコースを変更させられることもある。最悪の場合は、許可が取り消される場合もある。原則としてガイドを同行しなければならないことになっている。一旦、出発すると、途中でのコース変更は、北京やラサの公安局等の許可が必要であり、これは実際問題として無理である。したがって、出発前によくチェックすることが肝要である。

チベット内でのビザの延長は、ラサでできる可能性があるが、大変困難で、できないと考えておいたほうが無難である。(編注：Fビザの場合は、ラサで比較的容易に延長できる) もちろん、ラサ以遠では不可能である。北京か上海ならビザの延長ができる可能性は高い。また、観光ビザは数次ビザが取得できるが、1回の入国で30日以内であり、カテゴリー「F」のビザは最大1年間有効のものが取得できるが、入国は1回に限る。

## ■旅行手配

私たちは、日本の旅行社を通して、中国の旅行社に旅行手配を依頼した。現地では、一つの旅行社が、全コースについて手配はできないようで、行政区域毎に旅行社が変わり、主たる旅行社が派遣するスルー・ガイドの他に、行政区域毎のガイドが付くことになる。私たちが世話になった旅行社は、中国国際体育旅行社を筆頭に、浙江体育旅行社、成都海外旅遊公司、四川海外旅行社、甘肅国際旅行社、漢中国際旅行社、西藏青年旅行社、西藏世紀国際旅行社、日喀則国際旅行社と多社にわたった。

これらの旅行社がリレー式に旅行業務を引き継ぐ訳である。連絡がうまく付くかどうか心配したが、中国は携帯電話がかなり広範囲に利用でき、連絡は予想外にスムーズであった。携帯電話は中国内だけでなく日本を含んで全世界の電話にアクセスできる。ただし、掛ける場合だけでなく、受ける場合も掛ける場合の半額程度の料金が掛かる。

なお、国際ファックスは大きな町のホテルの「ビジネスセンター」で利用可能である。Eメールは使用できるが、日本語ソフトが組み込まれていないコンピュータがほとんどなので、中国語か英語でしか使用できない。ただし、添付ファイルにすれば日本語のまま日本に送信できる。利用

料金は時間計算であるが、電話の約半分位である。ホテルでなく、町のファックス屋、電話局、郵便局などからならホテルより安い。しかし、どこにでもある訳ではない。

## ■食事

チベット奥地でも人が住んでいれば、ほとんどの所で食事がとれる飲食店がある。もちろん、大きな町以外では、いわゆる大衆食堂や露店であり、衛生的ではないが、ホテルのレストランに比較すると驚くほど安い。「元」の下位のお金である「角」が巾をきかず世界である。私たちはこのような安食堂で食事を採ることが多かったが、出来る限り、熱を加えたものを採るように心掛けたので、幸い、軽い下痢程度のことはあったが、無事旅行を終えることができた。

何日かをテントで過ごしたので、その場合は当然ながら自炊したが、そのための食材は、ラサでほとんどのものが入手できた。燃料はプロパンを主とし、予備的に石油を使用した。キャンピング・ガスをカトマンズで少し購入してホテルの部屋で調理するときには使用したが、今回はほとんど使うことはなかった。

なお、キャンピング・ガスはラサのポクラ宮殿の前にある商店街の一角にある登山用具店「ノースフェイス」で入手できる。ただし、在庫は多くない。この店にはテントなど一応の登山用具が揃っている。

## ■旅行費用

チベット旅行に掛かる費用は、インドやネパールに比較して高い。ガイドを雇用することが半ば義務づけられているので、そのための費用が高むからである。ガイドなしの旅も可能であるが、中国語とチベット語ができないとトラブルが多いと予想される。

私たちがカイラス一周の21日間の旅のために支払った費用は一人42万円であった。これには調査用具、共同装備、隊員6名と中国人スタッフ6名の個人装備などを積むための5トン積みトラック1台と、人が乗るためのランドクルーザー2台、それぞれの運転手3名、コックとキッチンボーイ

各1名、日本語ガイド1名、カイラス一周の時のヤク8頭の費用、6日間のラサ滞在中とカイラスへの旅の行程中の宿泊と食事、ラサとシガツェの観光費、ラサから上海までの片道航空運賃が含まれている。

42万円という値段は、交渉を重ねた結果の値段であり、当初は63万円という見積りであった。ラサでいろいろ聞いたところによると、私たちのような観光シーズンのバックツァーの場合、航空運賃は含まないで、1日あたり140ドルというのが平均的値段のようである。この値段は、直接チベットの旅行社に依頼する場合である。ただし、信頼度に欠けることがあったり、交渉に時間とお金が掛かる。

## ■おわりに

登山を含めてチベット辺地旅行に関する手続きは、「中国登山の手引き」（「ヒマラヤ」、No.348、2000 Nov.、pp.16～23）、「外国人訪中登山管理法」（No.349.、pp.15～23）に詳述されていることが参考になる。また、前記の阿部さんの記事が参考になる。阿部さんたちの探査踏査は、パイオニヤワークとしての面白さがあり、H A Jの活動の一つとしてこのような、いわば冒険旅行が実施されてもよいのではないかと感じた。

私は、前述したカイラスからレーに抜ける旅の夢を捨ててはいない。できれば自作の四輪駆動電気自動車で行きたいと思っている。旅行時期は2002年の年末から2003年の新年を予定している。冬の時期に計画しているのは、川を渡ることが多く、道路も整備されていないチベットの降雨中や降雨後の川の氾濫による通行の困難さを避けるために、川が凍結する冬季が適当であると予想しているからである。ただし、極寒に耐えるための体力と気力が必須である。厳寒期にチベットを旅行した経験者のアドヴァイスを歓迎するとともに、同行希望者の問い合わせも期待している。

なお、安東浩正氏が1995年11月6日にカシュガルを自転車「天涯号」で出発し、11月25日にアリに到着し、カイラスを一周して12月12日にカトマンズに着いた47日間の記録（『チベットの白き道』、山と溪谷社、1999年4月）が参考になる。

# 現代の“シャングリラ”をめぐる本家争い

中村 保

## 観光開発の光と影

『失われた地平線』の作者、ジェームズ・ヒルトンがヒントにしたであろう、ジョセフ・ロックの1920-30年代のナショナル・ジオグラフィック・マガジンに載った紀行のなかで、1923年の旅が最も興味をひき、“シャングリラ”の舞台づくりの参考になったのではないかと思う。その文章を“The Great River Trenches of Asia”から紹介しよう。

「雲南北西部と東南チベットが接するところ、人間を容易に寄せつけない険しい山々の障壁と深く切れ込む荒々しい渓谷の景観ほど、探検家や写真家を魅了する世界が他にあるだろうか。アジアの、いや、中国の豪壮と渓谷と、その分水嶺に聳える峰々を訪れることができた人はごく限られていた。」

このロックに縁のある麗江在住の人物が“シャングリラ”雲南説の火付け役となったのである。

宣科（シユアンケ）老師、69歳。少数民族音楽の研究者がその当人で、彼の親父は、ロックに雇われてフィールド・ワークと調査を助けた。そして、ロックの業績や西欧人のチベット研究に宣自身が強い関心をもっていることを知った友人が、ヒルトンの“Lost Horison”（『失われた地平線』）を彼に贈った。宣は、はじめは荒唐無稽な物語として軽かたづけしたが、英語の原文を深く読みすすむうちに、ヒルトンのこの作品が、ロックの紀行に触発されたと考えるに至った。

宣は、ウォールストリート・ジャーナルの通信員に次のように語っている。

「仏教徒の寺院にカトリックの僧侶がいたり、200歳まで生きていたりとか、近代的な水洗トイレや下水道が完備していたりと、ばかげた設定が気になったが、小説の舞台を総合的に判断すると“シャングリラ”の地は、ロックの目線でもとらえた迪慶（デーチン）州であることがわかる。

私は自分の発見を州当局の役人に知ってもらうために、標高3000mのチベット族とヤクの世界、

中甸高原に行った。」

ちなみに、迪慶州は正確には迪慶藏族自治州で、州都のある中甸県、徳欽県、および維西傈僳族自治州からなっている。なお、藏族とはチベット族のことである。

宣の報告を受けた中甸の州政府は、ただちに観光としての利用価値を察知し、英語のできるスタッフを集めて、『失われた地平線』の翻訳を2週間で完了するよう命じた。知識人グループと役人が協議を重ね、1996年、中甸が“シャングリラ”であると宣言された。

本家争いの始まりである。

雲南省の省政府は担当責任者を派遣して、中甸県の“シャングリラ観光開発プロジェクト”の支援をスタートさせた。県政府は観光客誘致のための企画を検討し、「シャングリラへようこそ」というキャッチ・フレーズをつくり、4万元（約52万円）をかけて写真集を作成した。さらに、99年に開港した中甸空港を“中甸香格里拉空港”と命名してもらうため、省政府当局にロビー活動を行った。シンガポールや香港の旅行会社が“シャングリラ”の宣伝に力を入れてくれた結果、95年には66,000人だった観光客は、“シャングリラ”を宣伝した96年には669,000人と飛躍的に増えた。

中甸の街には観光客があふれるようになった。カラオケや冬虫夏草などの漢方薬、原作のイメージにはまったくそぐわない“シャングリラ大峽谷”など、金儲けのための商業主義一色になりつつある。空港ができ、中甸には5つの3つ星ホテルができ、喜捨を乞うぼろの僧衣をまとった僧のかたわらを、ミニスカートをはいった街の女が歩いている。

中甸に住む、46歳のチベット医薬病院の主任は「ここが“シャングリラ”だろうか。20年前は道端にバッグを置き忘れても、一週間ぐらいはだれも手をふれなかった。しかし、今は違う。人びとの心はすっかり変わってしまった」と嘆いている。

中国政府が観光開発を後押しするために、省都昆明から送りこんだ中甸県の共産党副書記が話した「“シャングリラ”を宣伝広告のために利用しているのではない。われわれが実現したいことは、中甸を次の世紀における人類最後の理想郷に変えることである」という、建前だけの空疎なセリフをどう受けとめたらよいのだろうか。

役人の批判はさておき、広い中国のなかで、最も貧しい地域である迪慶州の経済開発が急がれている現実も直視する必要がある。おりしも、この地方の経済が破産状態になったとき“シャングリラ”ブームが作られた。

生活の基盤を林業に大きく依存していたが、乱伐が続いたため、2年前に伐採が大幅に制限され、1998年の10月から全面禁止となった。この雲南省の伐採禁止令は44年ぶりに長江中流域を襲った大洪水がきっかけとなったもので、上流域の森林面積の割合が1950年代の30-40パーセントから、10%に減少している状況を踏まえたものである。州や県の財政や、林業にたずさわってきた住民の失業問題はきわめて深刻な状況になっている。また、政府の緊急対策は、迪慶州の山間に住む貧しい少数民族の職を奪いつつある。

そうした厳しい情勢なので、観光事業を経済発展計画の中核にして、収入の増加を図ることがいかに期待されているかが理解されよう。

中国中央政府の観光局が積極的に肩入れをし、97年の9月に、新華社を通じて世界のメディアに“シャングリラ”雲南説を流した背景もうなずける。立場上、あるいは役目柄からか、そう言わざるを得ない迪慶州共産党副書記の発言には同情の余地は大きい。

#### ユートピアのパラドックス中甸VS徳欽

私の友人、徳欽県旅游局の経理、松金扎西（ソジンザシ）さんは香格里拉研究会の対外的スポークスマンでもある。彼がメディア関係の訪問者に話す主張にまず耳を傾けよう。

「中甸が、“シャングリラ”のアイデアを持ちだした当初からわれわれは異議を唱えてきた。これは徳欽県としての公式的な見解である。『失われた地平線』に出てくる壮麗な雪山、カラカルヤほかの氷雪の峰々と氷河、豊かな青い月の谷は、徳

欽を取り巻く自然環境に似ている。」

これに対して、中甸側も譲らない、中甸の当局者の主張はこうだ。

「“シャングリラ”のアイデアを取り上げたのはわれわれである。プロジェクト・チームを組織して調査・研究し、もともと架空の土地を実像に置きかえた。われわれが先駆者であり、すでに『中甸-シャングリラ』という本を出版し、テレビのシリーズも制作している。中甸こそ“シャングリラ”である。」

徳欽県の共産党副書記が、扎西さんの話を引き取って続ける。

「たしかに“シャングリラ”は実在しない。しかし、歴史のうえでヒントを与えた場所が徳欽である。徳欽県茨中のカトリック教会には伝導所があっただけでなく、水洗トイレなど“シャングリラ”にでてくる生活の快適さを維持するため諸設備があった」と、徳欽こそ“シャングリラ”を名乗るに相応しい土地であると力説する。

が、中甸の代表も引き下がらない。徳欽にはないが、中甸に共通する“シャングリラ”の特徴を列挙する。曰く、「草原、湖、金鉱山……」しかし、公平にみて、中甸代表の論証は苦しまぎれのこじつけとの印象は否めない。

もう一度、徳欽の松金扎西さんに登場してもらおう。メコン川の対岸、チベット族の村落から、はるか高みに屹立する氷と雪の峰々に視線を移しながら、彼は、そこに楽園が存在するかのごとく話す。

「見ていただきたい。ここには美しい峡谷、雪山、氷河、そして僧院と、お膳立ては揃っている。徳欽こそ“シャングリラ”である。」

中甸は広い高原にあって、周囲に顕著な雪の高峰はないが、徳欽は、小説にでてくるような円錐形の雪峰や奇峰をいただくチベット仏教徒の聖山、梅里雪山メイリシユエシヤンと深い峡谷に接している。」

“シャングリラ”の本案争いはエスカレートして、とどまるところを知らないが、観光客誘致という経済的な命題がかかっているため調整は困難であろう。“シャングリラ”のコンセプトは、不老長寿の楽園というだけでなく、人びとが中庸を旨として静かに生きる、平和な理想郷でもある。この

争いごとのないはずのユートピアをめぐる、熱い闘いが引き起こされたのは皮肉である。

過熱するいっぽうの本家争いを沈静化しようと、雲南省政府は、双方が妥協するよう仲裁に乗り出しているが、両者とも応じる気配はない。中甸、徳欽のふたつの県を管理する上部行政機関である迪慶州政府が、折中案として「“シャングリラ”は迪慶州に存在する」という表現を統一的に使うことにして、本家争いに終止符を打つよう両県に命令した。反応はどうか。

松金扎西さんは「けっこうなアイデアだ。われわれは合意できる。けれども迪慶州は広大である。でも、迪慶州のどこかと聞かれたら、ヒルトンの記述があてはまる徳欽であると答えざるを得ない」と言う。

最近になって、この争いに、維西傈僳族自治州が新たに参入してきた。百数十年前、フランスの宣教師によって維西県のメコン川沿いの段丘に建てられた教会が“シャングリラ”のモデルであると言い始めている。フレンチ・カトリックの進出という観点では、維西のほうが歴史的により深い関係があり、争いは三つ巴の様相を呈してきた。

火付け役となった宣科老師はどう見ているのだろうか。彼は挫折感に苛まれながら呟く。

「私は政府上層部の役人どもがつくづく嫌いになりました。彼らの関心は、5つ星のホテルを建て、空港を造って、金儲けをする拝金主義一辺倒です。

私にとって、“シャングリラ”は理想郷です。今は、私の心のなかに存在するだけです」と言って、自分の胸に手をあててみせた。

#### 宣科老師をインタビュー

深い浸食の国からの帰途、麗江において、雲南省農業科学院の高山経済植物研究所所長楊静全さんの口利きのおかげで宣科老師と会い、彼の書齋で話を聞くことができた。

老師の住まいは麗江の古城・四方街のなかにあり、部屋の中には、ジョセフ・ロックが使った机や調度品が丁寧に保存され、大半の著書も整えられている。こぢんまりしたロック博物館を呈している。宣科老師は麗江中国大研納西古楽会の会長として、少数民族の伝統音楽の公演活動を通じてその普及に努めている。麗江の小劇場で公演を聴

いた観光客は多いと思う。

中村「老師は欧米では有名ですが、残念ながら、日本の皆さんはほとんど知りません。私は辺境通いをするうちに、ジョセフ・ロックのことを勉強し、中国の友人から老師のことも聞いておりました。

ごく最近では、アメリカのウォール・ストリート・ジャーナル紙で取り上げられた、シャングリラをめぐる記事のなかで老師の名前を目にしました。楊さんとは老朋友の間柄です。今日はいろいろお話しいただければ幸いです。まず生い立ちからお願いします。」

宣科「1930年生まれです。満でいえば68歳ですが、このへんでは数え年を使いますので、69歳と言っています。いま10歳の娘がいます。（と言って、そばにいる愛くるしい女の子の頭をなでる。）

一歳のときに、<sup>たらい</sup>盥の中で遊ぶ私を、ジョセフ・ロックが撮った写真があります。

私の父、<sup>シュアンミン</sup>宣明德は多くの言語に通曉し、納西族ではただひとり、英語を話しました。母はチベット族で、中甸の歌手でした。母方の祖母はチベットの貴族です。1934年にロックが撮った写真があります。叔父はダライ・ラマの大臣を務め、1954年にインドに一緒に亡命しました。後にアメリカに渡り、チベット独立運動に加わったことが、私の獄中での扱いに影響しました。」われわれの会話はほとんど英語で行なわれた。彼の流暢な英語に一瞬驚き、戸惑いを感じたほどである。宣科の家庭は裕福だった。家庭教師にドイツ人の女性を雇っていたという。解放前は搾取をする側の階層に属していた。清朝時代はマンダリン、すなわち高級官吏であったという。

中村「老師は、なぜそんなに英語がお上手なのですか。」

宣科「私の父はキリスト教の神父で、伝導所の学校経営に携わっていました。私はその学校で学び、そこで英語を習いました。それが現在の基礎になっています。ちなみに、1949年、すなわち新中国になる以前は、麗江の教会が、メコン沿いの小維西の教会も管轄していました。父が世話をしたロックには可愛がってもらいまし



た。よく覚えています。この机も彼が使っていたものです。」

中村「解放後ご苦労されたと聞きました。」  
宣科「苦労かどうかは別として、厳しい体験をしました。1957年、28歳のときに投獄され、78年に解放されるまで、21年間牢屋にいたわけです。毛沢東時代の百花斉放のあおりを受けました。当時、私は西洋音楽の指揮者をしていましたからです。叔父さんがダライ・ラマと亡命したこともあって、妹も親戚も難に遭いました。」

私は、1957年から61年まで昆明の監獄に収容され、61年から78年までは、雲南省のベトナムとの国境に近い錫鉱山で過ごしました。ここは政治犯が送られるところです。国民党との関係を捏造され、それが罪状とされました。昆明の監獄では、雲南省の共産党最高幹部のひとりと同室になり、政治的な事柄を多く学びました。

いずれにしても、人生のなかでいちばん輝かしいはずの青春時代を、塙の中で過ごしました。娘がまだ10歳なのがおわかりいただけると思います。」

臆することなく明るい口調で話してくれる。時代が変わったこともあろうが、天性の闊達な性格によるところが大きいと思う。

中村「長いこと投獄され、改革・開放の時代になってようやく名誉回復した人をほかにも知っています。小維西を拠点にして瀾滄江（メコン）、怒江（サルウィン）沿いの教会を巡回している、宣教師の施光榮シグアンロン老師のをご存知でしょうか。彼も、20年間牢屋に入っていたと聞きます。」  
宣科「よく知っています。たいへん信望の厚い神父です。」

中村「話をシャングリラ雲南説に移したいが、いかがでしょうか。」

宣科「私がきっかけを作ったことは事実です。」

ジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線』を克明に読みました。メモをとり、細かく検証していくうちに、著者と同時代のジョセフ・ロックの紀行が、シャングリラの場所の設定や歴史・風土の背景の下敷きになっていると確信するに至りました。

なかでも、その架空の楽園の思想的あるいは

宗教哲学者なバックボーンとなっている、中庸と寛容の精神がキー・ワードになります。それはキリスト教と東洋の宗教との結合です。もともと中庸は道教の思想です。ロックが研究にいそしんだここ麗江では、新中国になる以前はたくさん宗教が仲よく共生していました。景教（キリスト教ネストリウス派）、道教、儒教、ラマ教（チベット仏教）、大乘仏教（北伝仏教）、回教、キリスト教が棲み分けていました。

寛容さと環境に順応する柔軟性を兼ね備えた、平和を愛する納西族の特性が然らしめたと考えます。シャングリラの思想に合致しています。シャングリラではラマの大僧正しきが主ですが、宗教はいろいろな宗教のミックスです。」

中村「今、雲南省ではシャングリラをめぐる本家争いが起こっているようですが。」

宣科「我田引水が過熱していることにいささか失望しています。ウォール・ストリート・ジャーナルの記者にも話しましたが、争いをやめて、シャングリラは広い地域をさすものと考えれば、円満解決するだろうと思います。」

中甸や徳欽は血なまぐさい歴史をたどってきましたし、儒教、道教、大乘仏教はありません。一方、麗江は平和な土地で、すべての宗教がありました。自然の景観は梅里雪山の徳欽、精神的な風土の類似性は麗江がぴったりします。が、架空の場所のオリジンを争っても意味がありません。」

宣科老師はなかなかの人物との印象を深くした。納西族の故郷、麗江をこよなく愛したもうひとりの外国人がいる。宣科さんに訪ねるのを忘れたが、ロシア生まれのピーター・グーラートである。彼は、ロシア革命以後、トルキスタン、モンゴル、中国各地を廻り、最後に農業協同組合の駐在員として麗江に赴き、新中国になって退去するまで、一市民として九年間滞在した。彼は“Forgotten Kingdom” (P.Goullart, 1955, London) のなかで、麗江をシャングリラに擬している。その本をこう結んでいる。

「ジェームズ・ヒルトンが『失われた地平線』に書いたような世俗を離れた美しい楽園を、私は常に探し求め、夢にまでみてきた。小説の主人公は、

偶然、彼のシャングリラを発見した。しかし、私は自ら計画し、自分自身で麗江に地上の楽園を見つけだした。」

#### 米大統領ルーズベルトの“シャングリラ”

“シャングリラ”はある意味で日本との接点もある。戦中派の人なら、第二次大戦のドーリトルによる東京初空襲のことを覚えている方も多いと思う。“シャングリラ”には飛行機がついてまわるようだ。

1942年4月18日、アメリカのドーリトル中佐率いる陸軍爆撃機B25 16機が、航空母艦ホーネットを飛び立って、東京を中心に日本本土を爆撃した。軍事的には大きな損害を与えることはできなかったが、戦局に及ぼす心理的影響は小さくなかったといえよう。真珠湾攻撃からまだ半年も経っていなかったころである。日本国民の勝ち戦気分<sup>いくさ</sup>に冷水をかけ、連合国側の士気を高めた事件であった。

そのとき私は小学校二年生で、東京に住んでいたのだから、B25の飛来ことは覚えている。やがてB29が出現し、日本が敗戦への道をたどる予兆のひとつであった。

その日本初空襲が行なわれた日の午後、ハイドパークの公邸で執務中のルーズベルト大統領に、成果を知らせる第一報が伝えられた。

言うまでもなく大統領は大喜びで、政府関係者への指示や対応を即座に始めたが、爆撃機の発進地を秘匿<sup>ひそかく</sup>しておくべきと彼はとっさに判断した。ただちに、同席者に架空の発進地を考えるよう指示した。

補佐官のひとり、S. I. ローゼンマンが“シャングリラ”の名を進言した。ジェームズ・ヒルトンの小説のなかの秘密の場所、だれも知らない永遠不滅の土地の名が発進地としてうってつけであろうと大統領に説明し、大統領はすぐ承諾した。

4月21日、ワシントンで行なわれた記者会見での“シャングリラ”発言は、『失われた地平線』が映画化されてから5年後のことであり、また、当時のアメリカ人の心理に合ったため好評を得たので、大統領はおおいに満足したという。

その後、アメリカで“シャングリラ”の名を冠したものがふたつある。ひとつは戦争末期に竣工

した航空母艦であり、もうひとつは、メリーランド州にある大統領の山荘である。が、こちらのほうはアイゼンハワー大統領の代になってキャンプ・デービッドと名前が変わった。

いずれにしても、ルーズベルトの発言以降、“シャングリラ”は一般的には米国防空隊の秘密基地の意味として使われるようになった。

第2回目の東京空襲は四川省成都が発進基地となった。

こうして“シャングリラ”が、しだいに中国南西にひき寄せられてゆくのは暗示的である。

カラコルム、崑崙山脈、横断山脈に精通し、蔵書家でもあるニコラス・クリンチ氏に“シャングリラ”についてのコメントを求めたことがある。『失われた地平線』の映画のロケーションの場所についてのことは、私にとっては初耳だった、以下、コメントの要約である。

「“シャングリラ”は言うまでもなく空想の場所である。アフガンからカラコルム上空を過ぎ、チベットに飛んだ飛行機の航路をたどると、不時着地点はチベット北西部であると推定される。取り巻く自然と歴史を考察すると、“シャングリラ”の発想の源はチベット仏教と長寿の国、フンザの組み合わせにあると思う。

映画はカリフォルニアで作られた。画面の背景の山はマウント・ホイットニーとシエラ・ネバダの山々である。が、“シャングリラ”から帰還するときの景観には、1934年のディーレンフルトのカラコルム遠征隊が撮ったフィルムの一部のカットを使っている。いかに似ている場所があろうと、“シャングリラ”は徳欽ではないが、お話としてはおもしろいと思う」

最後に、現代の“シャングリラ”についてふれておこう。東南アジアから中国にかけて積極的に事業展開しているシャングリラ・ホテルのことである。マレーシア系の有数の華僑財閥によって経営されている五つ星の最高級のホテルで、お客に桃源郷の雰囲気味わってもらおうよう、設備とサービスを心がけている。東南アジアでは、“シャングリラ”と言えだれしもこのホテルのことと考えるほど知名度は高い。私のいちばん好きなホテルである。そのうち雲南にも進出するであろう。

# ネパールを騒がすマオイストの事件簿

最近ネパールも物騒になった。外務省からは中西部のロルパ、ルクム、ジャジャルコット、サリヤン、カリコットの各郡には「危険度3」の「渡航延期勧告」が出ているし、同じく中西部のスルケット、ピューター両郡と西部のゴルカ郡には「危険度2」の「観光旅行延期勧告」が出されている。その主な原因は「マオイスト」と呼ばれ、かつては共産党に属していた過激派が、共産党を追放され武装闘争による反政府活動を盛んに行っていることにあるらしい。彼等の活動拠点は、かつては中西部にあったらしいのであるが、最近では中部でも活動が見られる。トレッキングや登山に際しても十分配慮する必要があるようだ。

マオイストの最高責任者は、バブラム・バットライ（1954 生）で、全インド・ネパール学生連盟の委員長を（1977～88年）務めた。ブラーマンで学者。民主化後国会に9議席を得た「統一戦線（UPF）」党首。94年5月にバットライ・グループは、CPNを追放され、95年3月武装闘争が決議されロルパに拠点が置かれた。以下、日本ネパール協会の会報に掲載されたマオイストの事件を整理した。（記：山森）

## マオイストによる事件簿

1995,11,14

ロルファ（Rolpa）地区において武装グループが村人と政府役人を襲撃し死者2名を出した。117名が逮捕され64名は釈放された。

1996, 1, 13

覆面をしたグループが資本主義階層に対する人民闘争の開始であるとして、共産党（毛沢東派）のスローガンを唱えながら極西部のロルファ地区、ルクム地区、カトマンズ東のシンズリ地区の警察署を襲撃した。

1996, 1, 28

ルクム地区で警官隊とマオイストの銃撃戦があり、マオイスト6名が死亡。ロルファ地区ではマオイストが2名を殺害。共産党「毛沢東派」はバタン市で、デモ行進を行い、ピラをまいた。

1996, 3, 4

ロルパ地区で爆弾によるテロ攻撃があり1名が死亡。

1996, 4, 11

毛沢東派はプラチャンド事務局長の名前で「人民戦争」第一段階は終了したという声明を発表した。声明は連立政権とUMLを抑圧と無実の人々の殺人を理由に非難し、これまでに22名が殺されたと述べている。政府報告によると5名のテロリストが殺され、251名が逮捕され、「毛派」は無実の5名を殺害している。

1996, 5, 7

ルクム地区のタクセラ村でマオイストの襲撃で

警官2名が殺害された。

2000, 5, 28

インド共産党（ML）がネパールにおける毛沢東派共産党による人民戦争を支持することを表明。

1996,11,22

内務省は、本年毛沢東過激派のテロ活動により60名以上が死亡していると発表。

1997, 1, 4

ラメチャップ地区ベダン村で約300名の武装毛沢東過激派が警察派出所を襲撃し警察官2名、マオイスト3名が死亡。

1997, 2, 19

ルクム地区でマオイストが住民1名を殺害。

1997, 4, 4

kongress党シンパの教員1名が殺害される。

1997, 5, 8

ラムジュン地区サダルバザール村でマオイストが kongress党候補を殺害。

1998, 5, 18

コイララ首相は毛沢東主義過激派（マオイスト）の活動が活発な中部山岳地域のルクム、ジャジャルコット郡を歴代の首相として初めて訪問。

1998, 5, 30

マオイストが中部山岳地域の電話交換器を破壊したため、ロルファ、ルクム、ジャルコット一帯で音信不通になった。

1998, 5, 31

カブレ村村落開発地区委員長が35名のマオイストに襲撃され射殺された。

1998, 6, 2

ネパール警察はマオイスト特別作戦を10を超える村落開発地区で展開。7名のマオイストを射殺。

1998, 6, 16

内務省は5月26日から始まったネパール特別警察によるマオイスト特別作戦により、15日までに44名のマオイストと警察官が死亡し、マオイストの活動によりこれまで217名（マオイスト140名、民間人58名、警察官18名）が死亡したと発表。

1998, 10, 17

マオイストが「闘争第四フェイズ」と銘打って、テロ活動を活発化し始めた。

1999, 2, 1

シンドゥパルチョウク郡で村落開発区委員長がマオイストに射殺された。ドルパ郡ではマオイストによると思われるパイプ爆弾で警官3名が死亡。

1999, 2, 8

カリコット郡でマオイスト3名が射殺された。

1999, 2, 23

サリヤン郡で村落開発副委員長（共産党UML所属）がマオイストに襲撃され刺殺された。

1999, 3, 1

中西部ダン郡で警察出張所がマオイストに襲われ、警官7名が殺害された。10日にはロルパ郡で共産党UML活動家8名が殺害された。（後にマオイスト幹部は本件はマオイストの犯行ではないとの声明を発表）11日にはルクム郡で警察とマオイストの交戦により、8名のマオイストが殺害されるなど、マオイスト関連の大きな事件が連続した。

1999, 3, 10

チベット革命記念日に合わせ、ポカラでチベットからの移民をはじめとする一団がデモを行い、警官隊と衝突し27名が逮捕される事件が起きた。

1999, 6, 5

ラメチャップ郡のネパール銀行支店を100名を超えるマオイストが襲撃160万ルピーと金銀160万ルピー相当を強奪した。

1999, 7, 21

カドカ内務相は国会で、マオイストが人民闘争を開始してから現在までに884名（マオイスト650名、民間人153名、警官75名）が死亡したと報告した。

1999, 8, 4

警察幹部はマオイスト活動の活発な選挙区より選出された議員と会合を開き、出席の議員に対し、マオイスト問題解決にはテロ行為に対抗する法律と十分な資金が不可欠であることを強調した。

1999, 9, 23

マオイスト活動が活発なルクム郡とジャジャルコット郡で、警官7名、補助員1名殺害される。カドカ内相は、バクタイ政権発足後の100日余りでマオイスト関連の死亡者は108名（マオイスト81名、警官16名、民間人11名）と国会で報告。

1999, 10, 6

マハトVDC（村落開発地区）でマオイスト3人が警官と衝突し死亡。ポカラでミニバス爆発。死傷者無し。

1999, 10, 7

7日予定のマオイストのゼネスト（パンダ）を前に各地で爆弾騒ぎ。死傷者無し。

1999, 10, 24

マオイストが22日ギミレネパール・コングレス党党员を殺害。

1999, 11, 24

マオイスト12名、警官隊との衝突で死亡。

1999, 11, 25

マオイスト3名、警官隊との衝突で死亡。

1999, 12, 6

マオイストグループが小規模水力発電プロジェクト事務所から現金強奪。

1999, 12, 8

警官隊との銃撃衝突事件2件により、計4名のマオイストが死亡。（ルクム郡とグルカ郡）

1999, 12, 11

ジャジャルコット郡でマオイストが警官隊と衝突。4名が死亡。

1999, 12, 13

マオイスト学生シンパの集会で暴動（ポカラ）

1999, 12, 16

警官隊との衝突でマオイスト12名が死亡。

1999, 12, 21

ロルパ郡で警官隊との衝突でマオイスト4名が死亡。マオイストに誘拐されていた警察幹部がカトマンズに戻る。

2000, 1, 5

ジュムラ郡でマオイストが警官9名を殺害。

2000, 1, 6

ロルバ郡で警官と衝突でマオイスト2名が死亡。

2000, 1, 13

ヌワコット郡でマオイストが警察署襲撃、マオイスト1名、警官3名死亡。カリコット郡でマオイストと警官隊との銃撃戦でマオイスト1名死亡。

2000, 1, 15

ロルバ郡、ルクム郡で警官隊との衝突でマオイスト3名死亡。

2000, 1, 16

アチャーム郡でマオイスト2名、住民7名、警官隊との銃撃衝突で死亡。カイラリ郡で警官隊との銃撃衝突でマオイスト1名死亡。

2000, 1, 17

ロルバ郡、ルクム郡で共産党UML支持者、小学校教員、 kongress党支持者1名がマオイストによって殺害される。

2000, 1, 20

マオイスト活動家16人降伏。

2000, 1, 23

ジャジャルコット郡でマオイストと警官隊の衝突で警官6名死亡。

2000, 1, 27

マオイスト数人が kongress党員宅を襲撃。

2000, 1, 28

サルヤン郡で警官3名がマオイストとの衝突で死亡。

2000, 1, 30

ルクム郡で警官1名マオイストとの衝突で死亡。

2000, 2, 2

コイララ・ kongress党総裁、マオイストによる活動多発地帯の中西・極西部への巡回訪問開始。

2000, 2, 2

ロルバ郡、カリコット郡でマオイストと警官隊が衝突。マオイスト3名死亡。

2000, 2, 4

ルクム郡で kongress党員2名がマオイストによって殺害される。警官隊との銃撃戦でマオイスト2名死亡。

2000, 2, 5

コイララ・ kongress党総裁訪問地でマオイストによる爆弾爆発2名死亡。

2000, 2, 10

ラムジュン郡でマオイストによる襲撃で警察官5名が死亡。48日間で38名の警察官が死亡。

2000, 2, 13

本日、マオイストによる「人民戦争」開始5年目突入記念日。

2000, 2, 14

人民戦争4周年記念日に爆弾・強盗事件が相次ぎ少なくとも警官1名が死亡。

2000, 2, 16

ルクム郡、シンドゥリ郡でマオイストと警官が衝突、警官3名、 kongress党支持者1名死亡。

2000, 2, 17

スルケット郡で警官隊との衝突でマオイスト1名死亡。

2000, 2, 20

ロルバ郡でマオイスト警官15名を殺害。

2000, 2, 21

ドラカ郡で警官隊との銃撃戦でマオイスト1名死亡。

2000, 2, 22

カイラリ郡でマオイスト1名、 kongress党支持者1名が死亡。

2000, 2, 23

ルクム郡でマオイストと警官隊との衝突でマオイスト19名、警官1名が死亡。

2000, 2, 25

ルクム郡で kongress党員1名と村落開発委員長がマオイストに殺害される。

2000, 3, 5

アチャーム郡でマオイストが銀行を襲撃して、一千万ルピーを強奪した。

2000, 3, 10

カリコット郡でマオイスト2名が警官隊と衝突して死亡。マオイスト6日に誘拐した警官2名を「戦争捕虜」として扱う旨発表。

2000, 3, 15

マオイストがルクム郡の地方空港制圧を試みるが失敗。これが三度目。

2000, 3, 16

バットライ首相辞任。経緯の中に、バットライ政権の柔軟なマオイスト（毛沢東主義を標榜する反政府組織、極左過激派）対策がある。

国際赤十字デリー事務所代表、政府とマオイストとの対話仲介の用意がある旨発表。

2000, 3, 16

ピュータン郡でマオイスト銀行襲撃、武器奪取、警官2名を殺害。

2000, 3, 18

マオイスト5名警官隊と衝突で死亡。

2000, 3, 19

マオイスト、ルクム郡で被災者救済のための寄付金を住人から募る。

2000, 3, 26

グルミ郡でマオイストと警官隊が衝突。警官1名、マオイスト3名死亡。

2000, 4, 3

マオイストら3名、カトマンズ市内の電器店に手製爆弾を投げ込む。

2000, 4, 4

マオイスト、VDC委員長と校長を誘拐。

2000, 4, 5

スルケット郡でマオイスト警官隊と衝突し7名死亡。ピュータン郡でマオイストとの衝突で警官5名死亡。ジャバ郡ではマオイストが銀行を襲撃34万ルピーを奪う。

2000, 4, 14

マオイスト、ポカラ近郊のホテルより現金20万ルピーを強奪。スルケット郡で警官6名、バスガイド1名マオイストに誘拐され殺害される。

2000, 4, 27

スルケット郡で警官隊との衝突でマオイスト2名、民間人1名死亡。

2000, 4, 29

ロルパ郡でマオイストと警官隊の衝突でマオイスト3名、警官4名が死亡。

2000, 5, 2

ロルパ郡でマオイストと警官隊の銃撃戦でマオイスト4名が死亡。

2000, 5, 6

シンドゥパルチョーク郡でマオイスト現金4万ルピー引き出し直後の国民民主党職員を誘拐。11

日死体で発見。

2000, 5, 16

バンケ郡で警官隊との銃撃戦でマオイスト3名死亡。

2000, 5, 17

ロルパ郡、シンズリ郡でマオイスト警官1名と民間人1名を殺害。

2000, 5, 27

カイラリ郡で警官隊との銃撃戦でマオイスト6名が死亡。

2000, 6, 3

シンジャ郡でマオイスト銃撃戦で1名死亡。

2000, 6, 9

ジャジャルコット郡でマオイスト最高指導者ブラム・バットライが演説。この日ジャジャルコット郡で発生した事件で警官12名、マオイスト6名、村人7名死亡。

2000, 6, 14

カリコット郡でマオイスト、 kongress 党支持者2名を殺害。

2000, 6, 15

ネパール陸軍、200名をジャジャルコット郡に配置。

2000, 6, 16

ソルクンブ郡でマオイストとの衝突で警官3名死亡。

2000, 6, 18

中西部で警官隊と銃撃戦でマオイスト2名死亡。

2000, 6, 21

ジャジャルコット郡でマオイスト、kongress 党支持者を殺害。

2000, 6, 24

シンドゥパルチョーク郡でマオイスト、タトパニ税務署などを襲撃。

2000, 7, 3

ドラカ郡でマオイストが警察署を爆破。

2000, 7, 8

ダイレク郡でマオイスト、kongress 系村落開発委員会職員を殺害。

2000, 7, 9

バラ郡でマオイスト、警官隊との銃撃戦で3名死亡。

## 地域ニュース

### 《ネパール》

#### 26ヶ所に「氷河湖決壊洪水」の危険

ヒマラヤでは、地球の温暖化で氷河が急速に融け出し、水量の増えた氷河湖の縁が決壊して起きる「氷河湖決壊洪水」の危険性が、専門家の間で指摘されている。これについてカトマンズにある国際機関のICIMOD (International Center for Integrated Mountain Development) が9月19日、初めて公表した資料によると、ネパール国内2315ヶ所の氷河湖のうち26ヶ所がこうした危険性を孕んでいるという。ICIMODは衛星画像を一年かけて分析し、氷河や氷河湖の現況、洪水の危険性などをまとめた。

氷河湖決壊洪水については、これまで日本の専門家のチームが中心となって調査を行っていたが、危険性が指摘されていたのはツォー・ロールバ氷河湖、ツラギ氷河湖、イムジャ氷河湖など数ヶ所で、今回はこれを遥かに上回る箇所がリストアップされた。(日本ネパール協会/会報No.163号より)

## トピックス

### HAJ華甲望年会開れる

12月9日(土)夕刻6時からHAJ主催による「華甲望年会」が東池袋の「かんぼヘルスプラザ東京」に約70名が出席して開催された。

酒井國光会長の挨拶の後、今年HAJがヒマラヤへ派遣した3隊の登山報告がスライドによって行われた。パキスタン、サマー・キャンプのスパンティーク隊は、仙台から駆けつけた高橋敏雄隊員によって、中国のターラ・リ登山とクーラ・カンリ登山については野沢井歩常務理事によって行われた。

次いで司会を中川裕常務理事から尾形好雄常務理事に代わり、本年「還暦」を迎えられた西本武志(6月・東京)、伊地知博(10月・東京)、小林俊紀(11月・千葉)、沢田幸子(12月・東京)各

氏と、本年「喜寿」となられた古原和美顧問が壇上に登られ、HAJ会員のエヴェレスト・サミッターである今野一也(山形)、近藤和美(東京)、名塚秀二(群馬)、保坂昭憲(福島)、小野寺斉(東京)から、各人にチベットはカム地方の男性が頭髪に巻く勇者の印である赤い飾が贈られた。次いで及川美奈子(東京)、寺沢玲子(埼玉)、森秀子(群馬)、山森美智子(東京)の女性陣から男性陣へ、古谷朋之(東京)から沢田さんへそれぞれお祝いの10数年は枯れない花が贈呈され、望年会に入った。

途中から出席した江本嘉伸氏(10月・東京)にも八木原罔明(群馬)と宮川裕子(東京)からそれぞれお祝いの品を贈呈し、八木原常務理事の中締めで2000年の華甲望年会はお開きとなった。

尚、直前に所用のため欠席された稲田定重顧問(8月・福島)にも、お祝いの品をお届けした。

## Books

### 深い浸食の国

このところ東チベットと四川、雲南の知られざる山々と谷に通いつめている中村保氏の2冊目の著者。ヒマラヤの東/梅里雪山一周の旅/メコン・サルウィン分水嶺の山と谷/崗日夏布(カンリガルポ)山群/雲南最奥カトリック教会/横断山脈・雲南西北に消えた能海寛/雪山・石調・長征/四姑娘山の北・邛峽山系の岩峰群/探検史紀行/宣教師と探検家/四川省・康南の知られざる山と谷。の各章から成っている。

中村氏の手法は、自ら足を運んだ地域の現在について紹介すると共に、かつてその地に足跡を残した先人たちの活動を文献を引用して紹介することにある。こうすることによって、我々読者は労すること無くその地域の歴史と全体的な輪郭を知ることができるのである。英文の参考文献をこれほど多く掲げた書籍も少ない。写真も美しい。

エリック・シプトンは「未知の峠を越えて知られざる谷を探ることに喜びを見出した男」と評されるが、中村氏の行動もまた現代にあってシプトンを彷彿とさせる。氏の2冊の著書は2030年頃の

中国で中国語に翻訳され中国人に自国の辺境の歴史を知らしめることになることを確信する。氏が健康に留意されて、次なる著作を執筆されることを期待したいものである。(記：山森)

A5判 381頁(カラ-32頁) 3000円+税  
山と溪谷社 2000年11月10日刊

### 至上の頂 チョモランマ

東北6県と新潟県の山岳連盟所属の海外委員が地域の海外登山の振興のために「東北地区海外登山研究会」を発足させたのは1986年のことであり毎年各県持ち回りで研究会を開催してきた。この研究会にはH A Jも共催や後援の形で協力を惜しまなかったし、初期の頃は評者も各地へ出掛けた。

その研究会が母体となって世界最高峰のチョモランマに派遣した登山隊の報告書。いわゆる国内合同ともいえるこうした登山隊を組織するためには明確な理念が必要である。地域にいなれば分からない中央とのギャップがあつての登山隊成立とも思われるが、組織に纏わる苦勞と登山の中身

の収支がとれていることを願わずにおられない。  
(記：山森)

A4判 130頁(内カラ-30頁)

2000年11月19日刊(ビデオもセット)

〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-9-35

メープル仙台内 東北海登研事務局

■財政支援：田辺 治(1万円)

### 東京集会のお知らせ

日時 1月29日(月)午後7時～

内容 新年会

場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

### 第9回 中国登山研究会

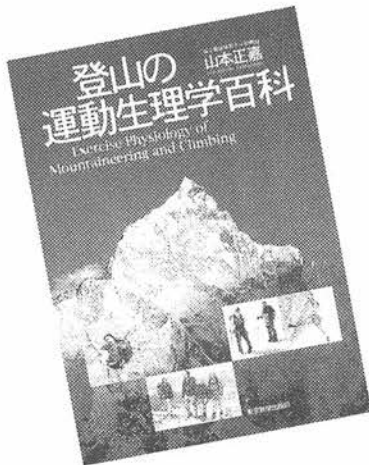
日時 2001年2月4日(日)9時～

場所 東京、豊島区民センター

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

# 登山の運動生理学百科

山本正嘉 著(国立鹿屋体育大学助教授)



「登山で疲れる原因は何か」「中高齢や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高齢者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円+税

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674(直) FAX03-3458-0689



# 2001年インドの主な祝祭日～インド国内公休日

☆在日インド大使館休館日。インドは太陰暦のため祝日は毎年変わる。

期 日	名 称	内 容
☆ 1月 1日(月)	New Year's Day	元旦。(インド国内は公休日にあらず。)
2日(火)	Guru Govind Singh Jayanti	ゴビンド・シン生誕祭。
14日(日)	Makara Sankranti / Pongal /Makaradi Sanana	ポンガル(収穫祭)。太陽が北半球に入る。
☆ 26日(金)	Republic Day	共和制記念日(1950年インドが共和国となる)。
29日(月)	Vasant Panchami /Sri Panchami	春の始まりを祝う北東インドの祭。サラスワティ女神を祀る。
2月 8日(木)	Guru Ravi Das Jayanti	ラビ・ダズ生誕祭
21日(水)	Maha Shivratri	シヴァ神が祀られ、信者は1日断食する。
☆ 3月 6日(火)	Idu'z Zuha(Bakrid)	予言者アブラヒムが息子を犠牲にした記念。
10日(土)	Holi	ホーリー、クリシュナ神を祀る。人々は年齢、カースト、宗教を問わず、色水をかけあう。
22日(木)	Indian New Years Day	インド元旦。
4月 2日(月)	Ram Navmi	
☆ 5日(木)	Muharram	イスラム暦の新年。イスラム教シーア派の哀悼の儀式。
6日(金)	Mahavira Jayanti	ジャイナ教開祖マハビーラ生誕祭。
☆ 13日(金)	Good Friday	キリスト受難祭。
13日(金)	Vaisakhi	ヒンドゥ暦の元旦。パンジャブ地方の祭。
☆ 5月 7日(月)	Buddha Purnima	釈尊生誕祭
☆ 6月 5日(火)	Milad-un-Nabi	予言者モハメッドの生誕祭。
8月 4日(土)	Raksha Bandhan	ラッキー。ヒンドゥの姉妹達は兄弟達の手首に神聖な紐を結び、兄弟達を悪から守る。
☆ 8月15日(水)	Independence Day	独立記念日(1947年独立)。
21日(火)	Janmasthan	
9月 2日(月)	Shri Krishna Jayanti	クリシュナ神生誕祭。
☆10月 2日(火)	Gandhi Jayanti	マハトマ・ガンジー生誕記念日。
24(水)~26日(金)	Durga Puja	
☆ 26日(金)	Vijaya Dasami/Dussehra	ダサラ。ラーマ神が魔王ラーバナに勝利した事を祝う。
☆11月14日(水)	Diwali/Lakshmi Puja	デワリ。ヒンドゥ教の新年。ヴィシュヌの妃神・富の女神ラクシュミーを迎える光の祭。
☆11月30日(金)	Guru Nanak Jayanti	シーク教開祖ナナク生誕祭。
12月17日(月)	Idu'l I Fitr(Ramazan Id)	イスラム断食月ラマザンの終わり。
☆12月25日(火)	Christmas Day	キリスト生誕祭。

※インド国内では、地域により役所関係の休日が異なる場合もある。

## 登山4団体共催

# ヒマラヤ登山者アンケート調査結果

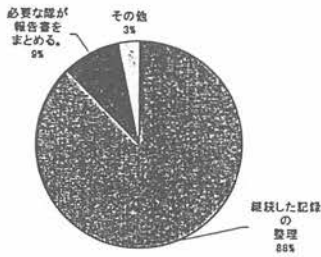
登山4団体共催による「ヒマラヤ登山者アンケート調査」の結果については、前号で実務担当者の共通見解を紹介した。

アンケート実施の背景には、平成10年3月に4団体が合意しながら、進展していない「海外登山情報センター（仮称）設立準備委員会」の立上がりを後押しすることがあった。アンケート結果は予想通り83%がこの構想を支持しており、同準備委員会の早期の開催が望まれる。アンケートでは、

問1: あなたはヒマラヤ登山の記録の整理についてどのようにお考えですか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計
A 整理した記録の整理	15	61	93	97	30	5	307
B 必要な録が報告書	4	4	12	8	4	0	32
C 必要はない	0	0	0	0	0	0	0
D その他	1	5	3	1	2	0	12
	20	76	108	106	36	5	351

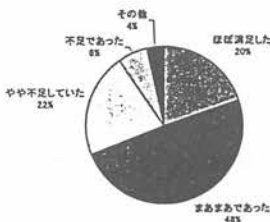
### 登山記録の整理



問3: あなたが学び収集した知識や情報の程度は登山実演の際、いかがでしたか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計
A ほぼ満足した	3	13	18	25	9	1	69
B まあまあであった	11	46	44	54	15	3	173
C やや不足していた	5	13	34	14	9	1	76
D 不足であった	0	1	9	9	2	0	21
E その他	1	3	3	5	1	0	13
	20	76	108	107	36	5	351

### 得た情報は役に立ったかどうか



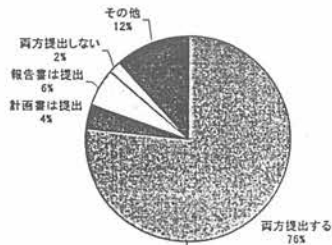
同センターが設立された場合、76%がセンターの指定する登山計画書&報告書を提出すると回答しており心強い結果である。

また、アンケートでは「山岳保険・共済」についても質問しており、75%が「組織に関係しない共済」組織の実現を期待しており、この分野でも既存の山岳団体の提携が期待されており、歴史的な経緯を踏まえることは当然としても、各団体首脳の前向きな決断が期待されている。

問5: あなたは「海外登山情報センター（仮称）」が設立された時、センターの基礎資料となる計画書や報告書（同封した見本の様式）を自費で提出することについてどのようにお考えですか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計
A 両方提出する	11	46	69	86	33	4	269
B 計画書は提出	1	4	6	3	0	0	14
C 報告書は提出	2	4	4	7	3	0	20
D 両方提出しない	0	2	2	3	0	0	7
E その他	6	20	7	7	0	1	41
	20	76	108	106	36	5	351

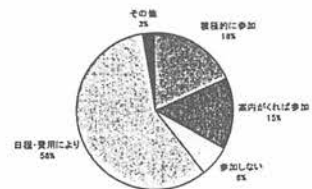
### 指定した計画書&報告書の提出



問7: あなたは高山病などの事故防止対策、環境保護のためのテクニク、テイクアウトの研修会などへの参加についてどのようにお考えですか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計
A 積極的に参加	3	8	21	24	8	0	64
B 案内があれば参加	2	9	19	13	10	3	56
C 参加しない	1	4	8	8	1	0	22
D 日経・費用により	13	53	61	59	15	3	204
E その他	0	2	3	7	2	0	14
	19	76	108	106	36	6	351

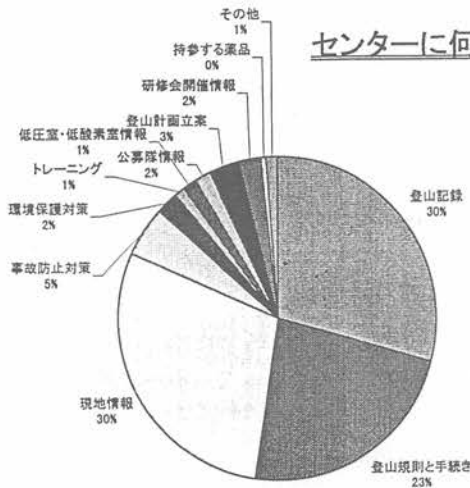
### 研修会への参加希望



問6: あなたは「海外登山情報センター(仮称)」が設立された時、センターからの情報提供(有料)について何を希望されますか?

		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	
A	登山記録	18	68	92	91	24	3	296	29.42%
B	登山規則と手続き	17	56	72	67	16	3	231	22.96%
C	現地情報	19	59	95	88	30	4	295	29.32%
D	事故防止対策	10	21	14	5	1	0	51	5.07%
E	環境保護対策	0	2	0	11	7	0	20	1.99%
F	トレーニング	1	2	3	5	1	0	12	1.19%
G	低圧室・低酸素室情報	0	1	6	4	1	1	13	1.29%
H	公募隊情報	0	2	6	6	4	0	18	1.79%
I	登山計画立案	1	10	5	10	3	1	30	2.98%
J	研修会開催情報	0	6	7	6	4	1	24	2.39%
K	持参する薬品	0	0	2	0	1	1	4	0.40%
L	その他	0	1	6	2	3	0	12	1.19%
	合計	66	228	308	295	95	14	1006	

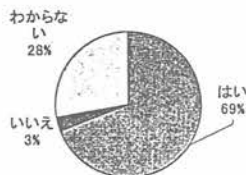
センターに何を期待するか?



問10: あなたは今後もヒマラヤ登山を実施しますか?

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	
A はい	12	43	76	83	24	3	241	69.75%
B いいえ	0	5	1	1	3	0	10	2.97%
C わからない	8	28	30	21	8	2	97	27.97%
	20	76	107	105	35	5	348	

今後ヒマラヤ登山を実施するか



年月 日 曜日 月号

2000年(平成12年)11月25日

# ヒマラヤ登山者へ 海外情報センター

かつては困難な準備と手続きが必要だったヒマラヤ登山。国際登山連盟(公称)の山で、これまでも登山者へのサポートがなされてきた。半面、海外登山の基本的な知識もないまま公称隊に参画して事故を繰り返す人も

## 事故防止へ研修も実施

「登山記録」はインターネットで簡単に入手できるが、登山者の中には、登山前に日本国内の山で取り巻く環境が異なる山に挑むことも少なくない。また、公称隊に参画している人も事故を繰り返している。このため、日本登山連盟は、海外登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。研修は、登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。研修は、登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。

## 登山4団体、設立へ

「登山記録」はインターネットで簡単に入手できるが、登山者の中には、登山前に日本国内の山で取り巻く環境が異なる山に挑むことも少なくない。また、公称隊に参画している人も事故を繰り返している。このため、日本登山連盟は、海外登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。研修は、登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。

Saturday Wide

「登山規則と手続き」が三巻になった。登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。研修は、登山者へのサポートを強化し、事故防止のための研修を実施する。

# トータル獲得標高の変遷

20世紀に花開いた「ヒマラヤ登山」の世界では、数多くの岳人が夢を実現し、或いは夢の途中でヒマラヤの峰々に眠った。

私は1983年9月に「ヒマラヤ142号」誌上において、ヒマラヤニストの評価の一方法として「トータル獲得標高」を提案した。

トータル獲得標高とは、標高七千メートル以上の山を複数登頂した岳人を対象として、登頂した複数の山の標高をトータルした数字のことである。例えば故・加藤保男は1973年秋にサガルマータ（8,848m）に南東稜から秋期としては世界で初めて登頂した。76年夏には縦走を目指してナンダ・デヴィ主峰（7,816m）に登頂した。この時点で彼の「トータル獲得標高」は、8848+7816=で16,664mとなるのである。

私は、必ずしも登頂万能主義ではないが、1980年代になって比較的簡単にヒマラヤの高峰にトライ出来る時代が到来したと言っても、同一人が何度も高峰に足を運ぶことはまだ難しく、八千メートル峰に相見えるチャンスはそう有るものではなく、まして登頂することは並大抵のことではない！との現実からトータル獲得標高を提案したのである。その後、毎年ヒマラヤ誌上にトータル獲得標高を整理発表してきた。

それから18年が過ぎた。ヒマラヤ登山を取り巻く状況は、提案した当時とずいぶんと様変わりしたが、トータル獲得標高の変遷を見ることによって、この間に活躍したヒマラヤニスト達の変遷をも知ることが出来る。今回は、全体のトータル獲得標高（左欄）と救助態勢が整っている旧ソ連を除いたトータル獲得標高（右欄）を掲載した。尚、トータル獲得標高の右横は、登頂回数と8千メートル峰登頂回数である。

（記：山森欣一）

## 〔トータル獲得標高ベスト10の変遷（2万メートル以上）〕

ベスト10の変遷（2万メートル以上）					旧ソ連を除くベスト10の変遷				
氏名	生年月日	獲得標高			氏名	生年月日	獲得標高		
〔1970～1978年〕					〔1970～1978年〕				
1 平林 克敏	1934,12	23,011m	3	I	1 平林 克敏	1934,12	23,011m	3	I
〔1979年〕					〔1979年〕				
1 重廣 恒夫	1947,10	23,190m	3	I	1 重廣 恒夫	1947,10	23,190m	3	I
2 平林 克敏		23,011m	3	I	2 平林 克敏		23,011m	3	I
3 小林 利明	1948,12	22,939m	3	I	3 小林 利明	1948,12	22,939m	3	I
〔1980年〕					〔1980年〕				
1 重廣 恒夫		32,038m	4	II	1 重廣 恒夫		32,038m	4	II
2 加藤 保男	1949, 3	25,512m	3	II	2 加藤 保男	1949, 3	25,512m	3	II
3 平林 克敏		23,011m	3	I	3 平林 克敏		23,011m	3	I
4 小林 利明		22,939m	3	I	4 小林 利明		22,939m	3	I
〔1981年〕					〔1981年〕				
1 加藤 保男		33,675m	4	III	1 加藤 保男		33,675m	4	III
2 重廣 恒夫		32,038m	4	II	2 重廣 恒夫		32,038m	4	II
3 尾崎 隆	1952, 9	25,062m	3	III	3 尾崎 隆	1952, 9	25,062m	3	III
4 田部井淳子	1939, 9	24,430m	3	II	4 田部井淳子	1939, 9	24,430m	3	II
5 山田 昇	1950, 2	23,958m	3	II	5 山田 昇	1950, 2	23,958m	3	II
6 平林 克敏		23,011m	3	I	6 平林 克敏		23,011m	3	I
7 小林 利明		22,939m	3	I	7 小林 利明		22,939m	3	I

## 〔1982年〕

1	×加藤 保男	42,523m	5	IV
2	山田 昇	32,125m	4	III
3	重廣 恒夫	32,038m	4	II
4	富田 雅昭 1956, 6	30,771m	4	II
5	尾崎 隆	25,062m	3	III
6	坂下 直枝 1947, 2	24,907m	3	II
7	川村 晴一 1947,12	24,907m	3	II
8	田部井淳子	24,430m	3	II
9	重野太肚二 1943, 4	23,939m	3	II
10	小松 幸三 1954, 5	23,579m	3	I

## 〔1983年〕

1	山田 昇	49,489m	6	V
2	×加藤 保男	42,523m	5	IV
3	尾崎 隆	42,426m	5	V
4	川村 晴一	33,755m	4	III
5	重廣 恒夫	32,038m	4	II
6	富田 雅昭	30,771m	4	II
7	×吉野 寛 1950, 2	25,626m	3	III
8	×秃 博信 1951,10	25,626m	3	III
9	鈴木 昇巳 1953, 2	25,144m	3	II
10	坂下 直枝	24,907m	3	II

## 〔1984年〕

1	山田 昇	57,015m	7	V
2	尾崎 隆	51,012m	6	VI
3	×加藤 保男	42,523m	5	IV
4	重廣 恒夫	40,520m	5	III
5	川村 晴一	33,755m	4	III
6	富田 雅昭	30,771m	4	II
7	×吉野 寛	25,626m	3	III
8	×秃 博信	25,626m	3	III
9	鈴木 昇巳	25,144m	3	II
10	坂下 直枝	24,907m	3	II

## 〔1985年〕

1	山田 昇	82,637m	10	VIII
2	重廣 恒夫	56,392m	7	IV
3	尾崎 隆	51,012m	6	VI
4	田部井淳子	46,164m	6	II
5	原 真 1939, 9	43,952m	6	I
6	×加藤 保男	42,523m	5	IV
7	和田 城志 1949,10	39,034m	5	II
8	高橋 和之 1943, 1	37,911m	5	I

## 〔1982年〕

1	×加藤 保男	42,523m	5	IV
2	山田 昇	32,125m	4	III
3	重廣 恒夫	32,038m	4	II
4	尾崎 隆	25,062m	3	III
5	坂下 直枝 1947, 2	24,907m	3	II
6	川村 晴一 1947,12	24,907m	3	II
7	田部井淳子	24,430m	3	II
8	重野太肚二 1943, 4	23,939m	3	II
9	小松 幸三 1954, 5	23,579m	3	I
10	高見 和成 1945, 5	23,570m	3	I

## 〔1983年〕

1	山田 昇	49,489m	6	V
2	×加藤 保男	42,523m	5	IV
3	尾崎 隆	42,426m	5	V
4	川村 晴一	33,755m	4	III
5	重廣 恒夫	32,038m	4	II
6	×吉野 寛 1950, 2	25,626m	3	III
7	×秃 博信 1951,10	25,626m	3	III
8	鈴木 昇巳 1953, 2	25,144m	3	II
9	坂下 直枝	24,907m	3	II
10	田部井淳子	24,430m	3	II

## 〔1984年〕

1	山田 昇	57,015m	7	V
2	尾崎 隆	51,012m	6	VI
3	×加藤 保男	42,523m	5	IV
4	重廣 恒夫	40,520m	5	III
5	川村 晴一	33,755m	4	III
6	×吉野 寛	25,626m	3	III
7	×秃 博信	25,626m	3	III
8	鈴木 昇巳	25,144m	3	II
9	坂下 直枝	24,907m	3	II
10	田部井淳子	24,430m	3	II

## 〔1985年〕

1	山田 昇	82,637m	10	VIII
2	重廣 恒夫	56,392m	7	IV
3	尾崎 隆	51,012m	6	VI
4	×加藤 保男	42,523m	5	IV
5	和田 城志 1949,10	39,034m	5	II
6	川村 晴一	33,755m	4	III
7	三谷統一郎 1958, 3	32,173m	4	III
8	村上 和也 1955, 3	25,975m	3	III

9	川村 晴一		33,755m	4	III	9×吉野 寛		25,626m	3	III
10	三谷統一郎	1958, 3	32,173m	4	III	10×禿 博信		25,626m	3	III
	[1986年]					[1986年]				
1	山田 昇		82,637m	10	VIII	1 山田 昇		82,637m	10	VIII
2	重廣 恒夫		56,392m	7	IV	2 重廣 恒夫		56,392m	7	IV
3	尾崎 隆		51,012m	6	VI	3 尾崎 隆		51,012m	6	VI
4	田部井淳子		46,164m	6	II	4×加藤 保男		42,952m	5	IV
5	原 真		43,952m	6	I	5 和田 城志		39,034m	5	II
6	×加藤 保男		42,952m	5	IV	6 川村 晴一		33,755m	4	III
7	和田 城志		39,034m	5	II	7 三谷統一郎		32,173m	4	III
8	高橋 和之		37,911m	5	I	8 宮崎 勉	1947,11	31,560m	4	II
9	近藤 和美	1941,11	35,973m	5	—	9 尾形 好雄	1948, 7	30,865m	4	I
10	川村 晴一		33,755m	4	III	10 村上 和也		25,975m	3	III
	[1987年]					[1987年]				
1	山田 昇		90,728m	11	IX	1 山田 昇		90,728m	11	IX
2	重廣 恒夫		56,392m	7	IV	2 重廣 恒夫		56,392m	7	IV
3	尾崎 隆		51,012m	6	VI	3 尾崎 隆		51,012m	6	VI
4	田部井淳子		46,164m	6	II	4×加藤 保男		42,523m	5	IV
5	高橋 和之		46,112m	6	II	5 和田 城志		39,034m	5	II
6	原 真		43,952m	6	I	6 川村 晴一		33,755m	4	III
7	×加藤 保男		42,523m	5	IV	7 三谷統一郎		32,173m	4	III
8	和田 城志		39,034m	5	II	8 大谷 映芳	1947, 4	32,138m	4	II
9	山本 宗彦	1959,12	37,511m	5	I	9 宮崎 勉		31,560m	4	II
10	近藤 和美		35,973m	5	—	10×斎藤 安平	1953, 1	31,431m	4	III
	[1988年]					[1988年]				
1	山田 昇		115,804m	14	XII	1 山田 昇		115,804m	14	XII
2	重廣 恒夫		56,392m	7	IV	2 重廣 恒夫		56,392m	7	IV
3	尾崎 隆		51,012m	6	VI	3 尾崎 隆		51,012m	6	VI
4	山本 宗彦		46,359m	6	II	4×加藤 保男		42,523m	5	IV
5	田部井淳子		46,164m	6	II	5 三枝 照雄	1957,10	40,015m	5	V
6	高橋 和之		46,112m	6	II	6 和田 城志		39,034m	5	II
7	原 真		43,952m	6	I	7 尾形 好雄		38,250m	5	I
8	近藤 和美		43,107m	6	—	8 川村 晴一		33,755m	4	III
7	×加藤 保男		42,523m	5	IV	9 三谷統一郎		32,173m	4	III
10	三枝 照雄	1957,10	40,015m	5	V	10 大谷 映芳		32,173m	4	II
	[1989年]					[1989年]				
1	×山田 昇		115,804m	14	XII	1×山田 昇		115,804m	14	XII
2	重廣 恒夫		56,392m	7	IV	2 重廣 恒夫		56,392m	7	IV
3	尾崎 隆		51,012m	6	VI	3 尾崎 隆		51,012m	6	VI
4	近藤 和美		50,117m	7	—	4×加藤 保男		42,523m	5	IV
5	遠藤 晴行	1957, 2	46,776m	6	III	5×三枝 照雄		42,015m	5	V
6	山本 宗彦		46,359m	6	II	6 三谷統一郎		41,021m	5	III

7	田部井淳子	46,164m	6	II	7	和田 城志	39,034m	5	II
8	高橋 和之	46,112m	6	II	8	尾形 好雄	38,250m	5	I
9	高橋 堅	44,165m	6	I	9	川村 晴一	33,755m	4	III
10	原 真	43,952m	6	I	10	大谷 映芳	32,173m	4	II
〔1990年〕					〔1990年〕				
1	×山田 昇	115,804m	14	XII	1	×山田 昇	115,804m	14	XII
2	重廣 恒夫	56,392m	7	IV	2	重廣 恒夫	56,392m	7	IV
3	遠藤 晴行	54,811m	7	IV	3	尾崎 隆	51,012m	6	VI
4	尾崎 隆	51,012m	6	VI	4	×加藤 保男	42,523m	5	IV
5	近藤 和美	50,117m	7	—	5	×三枝 照雄	42,015m	5	V
6	山本 宗彦	46,359m	6	II	6	三谷統一郎	41,021m	5	III
7	田部井淳子	46,164m	6	II	7	和田 城志	39,034m	5	II
8	高橋 和之	46,112m	6	II	8	尾形 好雄	38,250m	5	I
9	高橋 堅	44,165m	6	I	9	川村 晴一	33,755m	4	III
10	原 真	43,952m	6	I	10	遠藤 晴行	33,077m	4	IV
〔1991年〕					〔1991年〕				
1	×山田 昇	115,804m	14	XII	1	×山田 昇	115,804m	14	XII
2	近藤 和美	64,566m	9	—	2	重廣 恒夫	63,435m	8	IV
3	重廣 恒夫	63,435m	8	IV	3	尾崎 隆	51,012m	6	VI
4	遠藤 晴行	54,811m	7	IV	4	×加藤 保男	42,523m	5	IV
5	尾崎 隆	51,012m	6	VI	5	×三枝 照雄	42,015m	5	V
6	山本 宗彦	46,359m	6	II	6	三谷統一郎	41,021m	5	III
7	田部井淳子	46,164m	6	II	7	山本 篤	39,129m	5	III
8	高橋 和之	46,112m	6	II	8	和田 城志	39,034m	5	II
9	小西 浩文	44,803m	6	II	9	尾形 好雄	38,250m	5	I
10	高橋 堅	44,165m	6	I	10	川村 晴一	33,755m	4	III
〔1992年〕					〔1992年〕				
1	×山田 昇	115,804m	14	XII	1	×山田 昇	115,804m	14	XII
2	近藤 和美	72,767m	10	I	2	重廣 恒夫	63,435m	8	IV
3	重廣 恒夫	63,435m	8	IV	3	尾崎 隆	51,012m	6	VI
4	遠藤 晴行	54,811m	7	IV	4	三谷統一郎	48,803m	6	IV
5	尾崎 隆	51,012m	6	VI	5	×加藤 保男	42,523m	5	IV
6	三谷統一郎	48,803m	6	IV	6	×三枝 照雄	42,015m	5	V
7	山本 宗彦	46,359m	6	II	7	今村 裕隆	40,089m	5	III
8	田部井淳子	46,164m	6	II	8	山本 篤	39,129m	5	III
9	高橋 和之	46,112m	6	II	9	和田 城志	39,034m	5	II
10	小西 浩文	44,803m	6	II	10	尾形 好雄	38,250m	5	I
〔1993年〕					〔1993年〕				
1	×山田 昇	115,804m	14	XII	1	×山田 昇	115,804m	14	XII
2	近藤 和美	72,767m	10	I	2	重廣 恒夫	63,435m	8	IV
3	重廣 恒夫	63,435m	8	IV	3	尾形 好雄	62,422m	8	III
4	尾形 好雄	62,422m	8	III	4	尾崎 隆	51,012m	6	VI

5	田辺 治	1961, 1	62,236m	8	IV	5	三谷統一郎	48,803m	6	IV	
6	遠藤 晴行		54,811m	7	IV	6	名塚 秀二	1954,11	43,094m	5	V
7	小西 浩文		52,838m	7	III	7	×加藤 保男		42,523m	5	IV
8	尾崎 隆		51,012m	6	VI	8	×三枝 照雄		42,015m	5	V
9	三谷統一郎		48,803m	6	IV	9	田辺 治	1961, 1	40,502m	5	IV
10	江塚 進介	1961, 4	46,834m	6	III	10	今村 裕隆		40,089m	5	III
	〔1994年〕						〔1994年〕				
1	×山田 昇		115,804m	14	XII	1	×山田 昇		115,804m	14	XII
2	近藤 和美		80,775m	11	II	2	重廣 恒夫		63,435m	8	IV
3	田辺 治		69,274m	9	IV	3	尾形 好雄		62,422m	8	III
4	重廣 恒夫		63,435m	8	IV	4	尾崎 隆		51,012m	6	VI
5	尾形 好雄		62,422m	8	III	5	三谷統一郎		48,803m	6	IV
6	長尾 妙子	1956, 3	54,874m	7	IV	6	田辺 治		47,540m	6	IV
7	遠藤 晴行		54,811m	7	IV	7	名塚 秀二		43,094m	5	V
8	田部井淳子		53,174m	7	II	8	×加藤 保男		42,523m	5	IV
9	小西 浩文		52,838m	7	III	9	×三枝 照雄		42,015m	5	V
10	尾崎 隆		51,012m	6	VI	10	今村 裕隆		40,089m	5	III
	〔1995年〕						〔1995年〕				
1	×山田 昇		115,804m	14	XII	1	×山田 昇		115,804m	14	XII
2	近藤 和美		96,077m	13	III	2	尾形 好雄		69,497m	9	III
3	田辺 治		77,737m	10	V	3	重廣 恒夫		63,435m	8	IV
4	尾形 好雄		69,497m	9	III	4	田辺 治		56,003m	7	V
5	重廣 恒夫		63,435m	8	IV	5	尾崎 隆		51,012m	6	VI
6	小西 浩文		61,039m	8	IV	6	三谷統一郎		48,803m	6	IV
7	長尾 妙子		54,874m	7	IV	7	山本 篤		48,331m	6	IV
8	山本 宗彦		54,822m	7	III	8	今村 裕隆		47,795m	6	III
9	遠藤 晴行		54,811m	7	IV	9	名塚 秀二		43,094m	5	V
10	田部井淳子		53,174m	7	II	10	×加藤 保男		42,523m	5	IV
	〔1996年〕						〔1996年〕				
1	×山田 昇		115,804m	14	XII	1	×山田 昇		115,804m	14	XII
2	近藤 和美		103,182m	14	III	2	尾形 好雄		69,497m	9	III
3	田辺 治		84,772m	11	V	3	重廣 恒夫		63,435m	8	IV
4	尾形 好雄		69,497m	9	III	4	田辺 治		63,038m	8	V
5	重廣 恒夫		63,435m	8	IV	5	山本 篤		56,942m	7	V
6	田部井淳子		61,375m	8	III	6	岩崎 洋	1960, 2	51,449m	7	—
7	小西 浩文		61,039m	8	IV	7	尾崎 隆		51,012m	6	VI
8	山本 篤	1962,10	56,942m	7	V	8	三谷統一郎		48,803m	6	IV
9	長尾 妙子		54,874m	7	IV	9	今村 裕隆		47,795m	6	VI
10	山本 宗彦		54,822m	7	III	10	名塚 秀二		43,094m	5	V
	〔1997年〕						〔1997年〕				
1	×山田 昇		115,804m	14	XII	1	×山田 昇		115,804m	14	XII
2	近藤 和美		110,232m	15	III	2	尾形 好雄		85,583m	11	V



3	田辺 治	93,383m	12	VI	3	田辺 治	71,649m	9	VI		
4	尾形 好雄	85,583m	11	V	4	岩崎 洋	67,046m	9	I		
5	小西 浩文	77,274m	10	VI	5	山本 篤	65,105m	8	VI		
6	岩崎 洋	1960, 2	67,046m	9	I	6	重廣 恒夫	63,435m	8	IV	
7	品川 幸彦	1968, 2	66,842m	9	II	7	名塚 秀二	59,197m	7	VII	
8	山本 篤		65,105m	8	VI	8	三谷統一郎	56,966m	7	V	
9	重廣 恒夫		63,435m	8	IV	9	宮崎 勉	1947,11,	55,864m	7	V
10	江塚 進介		62,937m	8	V	10	尾崎 隆		51,012m	6	VI
	[1998年]					[1998年]					
1	近藤 和美	119,080m	16	IV	1×山田 昇		115,804m	14	XII		
2	×山田 昇	115,804m	14	XII	2	尾形 好雄	85,583m	11	V		
3	田辺 治	93,383m	12	VI	3	岩崎 洋	74,077m	10	I		
4	尾形 好雄	85,583m	11	V	4	田辺 治	71,649m	9	VI		
5	小西 浩文	77,274m	10	VI	5	山本 篤	65,105m	8	VI		
6	岩崎 洋	74,077m	10	I	6	重廣 恒夫	63,435m	8	IV		
7	品川 幸彦	66,842m	9	II	7	名塚 秀二	59,197m	7	VII		
8	山本 篤	65,105m	8	VI	8	三谷統一郎	56,966m	7	V		
9	重廣 恒夫	63,435m	8	IV	9	宮崎 勉	55,864m	7	V		
10	江塚 進介	62,937m	8	V	10	尾崎 隆	51,012m	6	VI		
	[1999年]					[1999年]					
1	近藤 和美	127,206m	17	V	1×山田 昇		115,804m	14	XII		
2	×山田 昇	115,804m	14	XII	2	岩崎 洋	88,798m	12	I		
3	田辺 治	93,383m	12	VI	3	尾形 好雄	85,583m	11	V		
4	岩崎 洋	88,798m	12	I	4	山本 篤	72,639m	9	VI		
5	尾形 好雄	85,583m	11	V	5	田辺 治	71,649m	9	VI		
6	小西 浩文	77,274m	10	VI	6	名塚 秀二	67,224m	8	VIII		
7	山本 篤	72,639m	9	VI	7	重廣 恒夫	63,435m	8	IV		
8	田部井淳子	68,814m	9	III	8	谷川 太郎	1967, 6	57,297m	7	VI	
9	名塚 秀二	1954.11	67,224m	8	VIII	9	三谷統一郎		56,966m	7	V
10	品川 幸彦		66,842m	8	II	10	宮崎 勉		55,864m	7	V
	[2000年]					[2000年]					
1	近藤 和美	135,257m	18	VI	1×山田 昇		115,804m	14	XII		
2	×山田 昇	115,804m	14	XII	2	岩崎 洋	95,825m	13	I		
3	岩崎 洋	95,825m	13	I	3	尾形 好雄	85,583m	11	V		
4	田辺 治	93,383m	12	VI	4	名塚 秀二	75,275m	9	IX		
5	尾形 好雄	85,583m	11	V	5	山本 篤	72,639m	8	VI		
6	小西 浩文	77,274m	10	VI	6	田辺 治	71,649m	9	III		
7	名塚 秀二	75,275m	9	IX	7	近藤 和美	1941,11	63,586m	8	VI	
7	山本 篤	72,639m	8	VI	8	重廣 恒夫		63,435m	8	IV	
8	田部井淳子	68,814m	9	III	9	谷川 太郎		57,297m	7	VI	
10	品川 幸彦	66,842m	8	II	10	三谷統一郎		56,966m	7	V	

## ■ 寸 感 ■

とうとう20世紀も終わる。ママリーや能海寛が活躍した時から100年。長いのか短いのか実感は湧かない。しかし、具体的な事を思い返すと、唐沢岳幕岩を初登攀したのが33年前だと思つと、随分と昔のような気がする。だが、ヒマラヤ登山を始めてから25年になるが、これは「あつと」云う間であるような気もする。山で死んだ友のことを思い出すと、何んと時の流れは早いんだろうと思つ時もある。

21世紀には行かなければならない「山」がゴマンとある。またまた忙しい日々を追われるのだろう。いつも前を見ていたい。自分一人ではなく仲間達と。20世紀最後のつぶやき。 (山森)

## 事務局日誌 (12月)

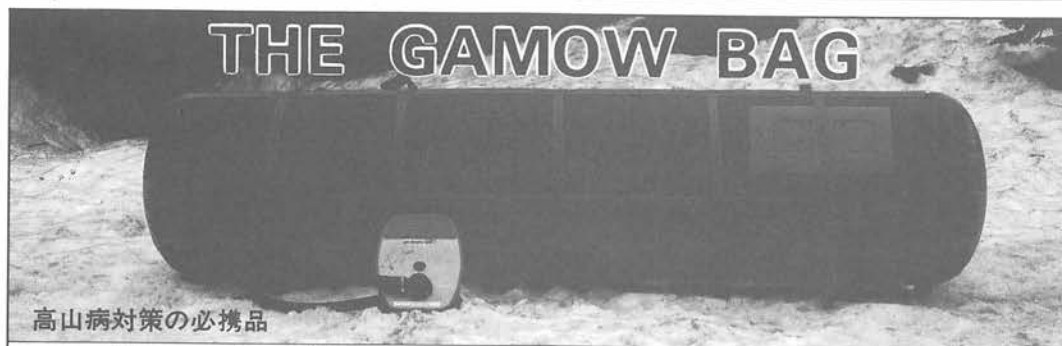
- 1日(金) 山岳保険・共済懇談会の件、3団体と都岳連へ発送  
 4日(月) 同上懇談会日程調べを担当者へ発送  
 8日(金) ヒマラヤ350号発送

労山「望年会」於エミール、酒井、山森、中川、寺沢

- 9日(土) 「H A J華甲望年会」於 かんぽヘルスプラザ東京 (66名)  
 12日(火) 共済懇談会日程発送  
 14日(木) 故・角田不二遺稿・追悼集発送  
 25日(月) 東京集会 (12名)  
 27日(水) 御用納め

## ヒマラヤ No.351 (2月号)

平成13年1月10日印刷 13年2月1日発行  
 発行人 山森欣一  
 編集人 山森欣一  
 発行所 日本ヒマラヤ協会  
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7  
 萬栄ビル501号  
 電話 03-3988-8474  
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

## ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター  
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階  
 TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510  
 (隊荷の輸送、航空券の手配などお任せください。)

# TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 —

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



## 遙かなる高みへ

トレッキング・  
登山隊の許可  
取得から航空券・  
現地手配までお引き  
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・  
パキスタン・中国・  
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・  
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1  
岩波書店アネックス5階  
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階  
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)  
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL  
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638  
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは  
フリーダイヤルをご利用下さい  
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004